

演劇表現を導入した プレゼンテーション話法について

静岡大学情報学部行動情報学科 3年

石井 智也

指導教員 湯浦克彦

要旨

目次

要旨	2
目次	3
図一覧	4
表一覧	1
第1章 序論	4
1.1 研究背景	5
1.2 研究目的	5
1.3 論文の構成	5
第2章 プレゼンテーションについて	4
2.1 プレゼンテーションの概要	5
2.1.1 プレゼンテーションの概要と目的	5
2.1.2 プレゼンテーションの重要性	5
2.2 プレゼンテーション話法	5
2.2.1 プレゼンテーション話法の概要	5
2.2.2 プレゼンテーション話法の学習方法の現状	5
2.3 先行研究について	5
第3章 演劇表現を用いたプレゼンテーションの制作法	4
3.1 演劇表現の概要	5
3.1.1 演劇について	5
3.1.2 演劇の3つの作成フェーズ	5
3.1.3 演劇表現の8つの要素	5
3.2 プレゼンテーション話法と演劇の結びつき	5
3.2.1 演劇とプレゼンテーションの共通点	5
3.2.2 演劇の8つの要素と関連研究との結びつき	5
第4章 映像教材を用いた話法改善実験の方法	4
4.1 実験の方針	5
4.2 実験に用いるものの概要	5

4.2.1	チェックリストの概要	5
4.2.2	映像集の概要	5
4.3	受講者について.....	5
4.4	実験の方法.....	5
第5章	映像教材を用いた話法改善実験の評価	4
5.1	評価の方針.....	5
5.2	評価の方法.....	5
5.3	評価の結果.....	5
5.4	実験による効果の考察	5
第6章	スキットを用いたプロトタイプ発表実験の方法	4
6.1	実験の方針.....	5
6.2	実験に用いるものの概要.....	5
4.2.1	チェックリストの概要	5
4.2.2	映像集の概要	5
6.3	受講者について.....	5
6.4	実験の方法.....	5
第7章	スキットを用いたプロトタイプ発表実験の評価	4
7.1	評価の方針.....	5
7.2	評価の方法.....	5
7.3	評価の結果.....	5
7.4	実験による効果の考察	5
第8章	結論.....	4
8.1	結論.....	5
8.2	今後の課題.....	5
参考文献	1
謝辞	1
付録	1

図一覧

図 金ヨソソ プレゼンテーション製法に関する学生向け学習方式 (2016)	1
図 本研究にて使用するプレゼンテーション制作ガイド	1
図 発声と制作ガイドとの結びつき	1
図 滑舌と制作ガイドとの結びつき	1
図 抑揚と制作ガイドとの結びつき	1
図 間と制作ガイドとの結びつき	1
図 焦点と制作ガイドとの結びつき	1
図 姿勢と制作ガイドとの結びつき	1
図 表情と制作ガイドとの結びつき	1
図 手振りと制作ガイドとの結びつき	1
図 映像教材を用いた話法改善実験の流れ	1
図 プレゼンテーション自己評価チェックリスト	1
図 被験者 A のチェックリスト	1
図 被験者 B のチェックリスト	1

表一覧

表 1 プレゼンテーション話法の学習方法の評価	1
表 2 演劇とプレゼンテーションの共通点	1
表 3 演劇の 3 つの作成フェーズと 8 つの要素との対応表	1
表 4 実験結果の評価	1

第 1 章 序論

1.1 研究背景

今日では、情報化社会が進み、大学の講義の中での成果発表や就職活動中の面接の一環でプレゼンテーションを行う機会が数多くなっている。厚生労働省の若年者就職基礎能力習得の目安(参考文献[1])の中でも必要な自己表現能力として「状況にあった訴求力のあるプレゼンテーションが行うことができる。」ことを挙げている。

このような情勢であるので、大学の講義や多くの書籍によってプレゼンテーションにおける論理的シナリオ作成、スライドデザイン、聴衆分析などの方法を学ぶことが出来るようになってきている。しかし、プレゼンテーション中の話し方については多く語られることが無く、自らの経験によって能力を獲得していかなければならなくなっている。

1.2 研究目的

本研究では、プレゼンテーションの話し方(以下、「話法」とする)の品質を高めるために、演劇手法を用いたプレゼンテーション話法の教材映像を開発した。これを用いて学習実験を行い、実験前後でどのような変化が現れたかを評価する。これは先行研究である金ヨソ(2016)「プレゼンテーション制作法に関する学生向け学習方式」のガイドをさらに拡張するものである。学習の対象者はビジネスコンテストなどへの出場経験があり、プレゼンテーションの論理的なシナリオ構成などに経験を有する中級者である。

1.3 論文の構成

第 2 章 序論

2.1 プレゼンテーションとは

2.1.1 プレゼンテーションの概要と目的

プレゼンテーションとは、澤円の著書『マイクロソフト伝説マネージャーの世界 No.1 プレゼン術』(参考文献[2])では「①聴いた人がハッピーになる、②聴いた人から行動(決断)を引き出す、聴いた内容を他人に言いふらしたくなる」という3つがゴールとなるものと定義している。また、ジェリー・ワイズマンは著書『パワー・プレゼンテーション』(参考文献[3])にてプレゼンテーションの目標を「相手を説得する」こと「説得とは、聞き手を行動に向かわせるための基本手段であり、聞き手が思わず『なるほど! (Aha!)』とひざを打つような経験をさせるものだ」と述べている。

このようにプレゼンテーションとは、ただ単に事実を並べ聴衆に「理解」させるだけのものではなく、その先の行動までも目指して行うものであると分かる。

2.1.2 プレゼンテーションの重要性

現代社会では、ビジネスの場でのプレゼンテーションだけでなく、大学の講義や就職活動の面接の一環としてなど、プレゼンテーションを行う機会が増えている。2005年度の日本経済団体連合会による『新卒者採用に関するアンケート調査の結果』(参考文献[4])でも「選考にあたっての重視点」として、75.1%の企業がコミュニケーション能力を挙げており、最も重要視されている。

プレゼンテーションを重要視しているのは日本だけでなく、ジーン・セラズニーの著書『マッキンゼー流プレゼンテーションの技術』(参考文献[5])によると「米国ではとくにプレゼンテーション能力に重きを置く。初めての就職先として広告代理店を勧める親が多いのは、わが子に若いうちからプレゼンテーションのスキルを身につけさせたいと願う親御ごろからだそうだ」とアメリカ合衆国でもプレゼンテーションを重要視していることが分かる。そして、グローバルスタンダードが広く意識されている今日の日本で、アメリカ合衆国のようにプレゼンテーション能力が重要視されているのも理解できる。

2.2 プレゼンテーション話法とは

2.2.1 プレゼンテーション話法の概要

本論文での「プレゼンテーション話法」とは、プレゼンテーションの作成段階においての

「話し方の方法」と定義する。定義の中には「話す内容の論理的な構成」などは含まれず、実際の発声や身体表現などの分野に絞られる。

プレゼンテーション作成段階におけるプレゼンテーション話法の位置づけは、『マッキンゼー流プレゼンテーションの技術』（参考文献[5]）では、第1章「状況を明確にする」、第2章「プレゼンテーションを設計する」、第3章「プレゼンテーションを実施する」の三章構成の第3章で述べられている。

このようにプレゼンテーション話法はプレゼンテーションの論理構成やスライドデザインが終わった後に設計し練習していくものとされている。

2.2.2 プレゼンテーション話法の学習方法の現状

プレゼンテーション話法の学習は、プレゼンテーションの論理構成やスライドデザインと比べて、教材や学習方法が少ない現状である。Google の検索結果ではプレゼンテーションの論理、スライドデザイン、話法(話し方)のヒット数はそれぞれ 2,710,000 件、3,130,000 件、576,000 件と違いが表れている。

その中でも、5つの学習方法について比較した。

[1]インターネットページ

インターネットでのプレゼンテーションに関するページは豊富に存在している。しかし、プレゼンテーション話法に特化して専門的に取り扱っているページは少ない。

良い点としては Youtube での映像教材もあり、文章のみで学習するよりも分かりやすく紹介されているものもある。

Youtube でプレゼンテーションを取り扱った動画として、中田敦彦の Youtube 大学(2019年4月20日)「プレゼンの準備の仕方と正しい練習法」<https://www.youtube.com/watch?v=ovxorfBOVRE> などが挙げられる。

[2]専門書籍

インターネットページと同様にプレゼンテーション話法に特化した書籍は少ない。

また、文章や図のみでの説明になるため、音声や動きの説明をする際に伝わりづらくなってしまう。

話し方を専門に扱った書籍としては D.カーネギーの著書『話し方入門』創元社などが挙げられる。

[3]他人のプレゼンテーション鑑賞

Youtube などでプレゼンテーション話法のスキルが高い他人を参考にし、自らの改善を行うことは可能である。

しかし、体系化はされていないため、自らでスキルを抽出し学習することが必要になる。

[4] ワークショップや講義

講師による指導が受けられるため、より詳しく、専門的な話を学ぶことができる。少人数を対象としたワークショップや講義なら個人的な指導を受けることも可能である。

しかし、諸所で開催されているわけではなく、体験しようと思うと時間的や金銭的に労力がかかる。

本研究でもこの形式に近い形を採用した。

[5] 他者評価・自己評価

他者評価などは特に、聴衆と同様の視点から評価してもらうことが可能であり、より分かりやすいプレゼンテーションを心掛けることが出来る。

しかし、評価する人物に知識がない場合、効果的な指摘が得られず改善に繋がらない場合がある。

このようにプレゼンテーション話法の学習法は論理構成やスライドデザインと比べて効果的な学習方法が乏しいことが分かった。

2.3 先行研究について

本研究では、金ヨソの『プレゼンテーション制作法に関する学生向け学習方式』（参考文献[6]）のプレゼンテーション制作ガイドを拡張する。



図1 金ヨソソ プレゼンテーション製法に関する学生向け学習方式 (2016)

先行研究では本研究の話法に該当する箇所は第3 STEP である PERFORMANCE STEP で取り扱っている。しかし、プレゼンテーションの話法は発表場所の環境条件やスライドデザインなどにも大きく影響されるものである。また、資料制作と同時に進めるものであると考えたため新たにプレゼンテーション制作ガイド(以下制作ガイドとする)を作成した。それが以下の図である。



図2 本研究にて使用するプレゼンテーション制作ガイド

本研究ではこの制作ガイドを利用し、プレゼンテーションの制作過程と話法との関連を示していく。

また、プレゼンテーション話法の関連研究として、横井聖宏、馬場康輔、須藤秀紹、山路奈保子の『発話中の「間」がプレゼンテーションに対する聴衆の支持に与える影響』（参考文献[7]）がある。この研究は後述する「間」とプレゼンテーションの聴衆の支持の関係を分析したものである。研究方法はビブリオバトルにおいて音声サンプリングを行い、間の長さとお出現回数の値を算出し、その結果を考察したものである。結論としては、「文章であれば

読点がつけられるような自然な位置に『間』が挿入された発表は聴衆の支持を得やすい」というものになった。

第3章 演劇表現を用いたプレゼンテーションの制作法

3.1 演劇表現の概要

3.1.1 演劇について

演劇とは、観客に対し、俳優が舞台上で身振りや台詞などで、何らかの物語や人物などを形象化し、演じて見せる、芸術のことである。世界的な演劇の歴史としては、中世の聖書の内容を演じて見せた教会劇が原始の演劇とする説がある。また、日本での演劇の歴史は鴻上尚史の著書『演技と演出のレッスン』によると、能や歌舞伎などの伝統芸能の後、明治末期に西洋の演劇の影響によって始まった「新劇」と呼ばれるものが今現在の演劇のタイプの始まりであると述べている。

3.1.2 演劇の3つの作成フェーズ

演劇には大きく3つの作成フェーズが存在する。これらはそれぞれ、脚本、演出、演技と呼ばれるものであり、脚本家、演出家、俳優が専門に行っている。

今回のプレゼンテーション話法の定義では脚本に当たる論理構成や演出に当たるスライドデザインなどは含まないので、俳優の技術について学習教材を作成する。

3.1.3 演劇表現の8つの要素

本研究の演劇表現では、俳優の技術を8つの要素に分類した。これはそれぞれ発声、滑舌、抑揚、間、焦点、姿勢、表情、手振りである。8つの要素の詳しい内容については3.2.2にて述べる。

3.2 プレゼンテーション話法と演劇の結びつき

3.2.1 演劇とプレゼンテーションの共通点

3.1.1にて演劇とは「観客に対し、俳優が舞台上で身振りや台詞などで、何らかの物語や人物などを形象化し、演じて見せる、芸術のことである。」と述べたが、これはプレゼンテーションにも共通すると考察した。演劇とプレゼンテーションでは表1のように、観客≒聴衆、舞台≒ステージ、台詞≒台本のように「聴き手に向けて、他人の前で、伝わるように話す」という点で共通している。

表1 プレゼンテーション話法の学習方法の評価

共通点	演劇	プレゼン
対象	観客	聴衆
立つ場所	舞台	ステージ
話す内容	セリフ	台本

3.2.2 演劇の8つの要素と関連研究との結びつき

3.1.4で8つの要素について述べたが、ここではその詳しい内容と制作ガイドとの結びつきについて述べる。

[発声]

発声とは声を届けるという技術の要素である。これは話法としては最も基礎的な項目である。また、正しい発声は伝えたいことを意図通りに伝える効果がある。マイクなどの機材に大きく左右され、当日までの調整が必要な項目のため制作ガイドとは条件把握の項目と関連している。



図 発声と制作ガイドとの結びつき

[滑舌]

滑舌とは言葉を伝えるという技術の要素である。これは話法としては発声について基礎的な項目である。綺麗な滑舌は発声と同じく伝えたいことを意図通りに伝える効果があり、制作ガイドでも条件把握と関連している。



図 滑舌と制作ガイドとの結びつき

[抑揚]

抑揚とは文章の読み方の流れを変化させることで重要なメッセージを強調させるための技術の要素である。効果的に抑揚を利用した結果、聴衆の注意が強調した言葉に向き、内容が伝わりやすくなる。メッセージの内容やスライドデザイン、録音による調整に影響される項目のため、制作ガイドでは聴衆分析、ストーリーライン、資料制作、リハーサルと関連している。



図 抑揚と制作ガイドとの結びつき

[間]

間とは聴覚をコントロールする技術の要素である。これは、敢えて空白の時間を作ることによって、聴衆が自分の考えをまとめることや、間の後の言葉に注意を惹きつける効果がある。プレゼンテーションの流れやスライドデザインなどに左右される項目のため制作ガイドではストーリーライン、資料制作に関連している。



図 間と制作ガイドとの結びつき

[焦点]

焦点とは視覚をコントロールする技術の要素である。自らの視線、身体の向き、スライドデザインなどで聴衆の視線を操ることで、聴衆が今注目すべき場所が分かり、プレゼンテーションの内容をより簡単に理解させる効果がある。発表場所の環境やスライドデザインなどに左右される項目のため制作ガイドでは条件把握、資料制作に関連している。



図 焦点と制作ガイドとの結びつき

[姿勢]

姿勢とは unnecessaryな情報をそぎ落とすために注意することである。これは重要な視覚情報である身体を必要以上に使わないことで、聴衆の注目がプレゼンテーションの内容のみに集中する効果がある。実際にプレゼンテーションを行う環境などにも左右される項目のため制作ガイドでは条件把握と関連している。

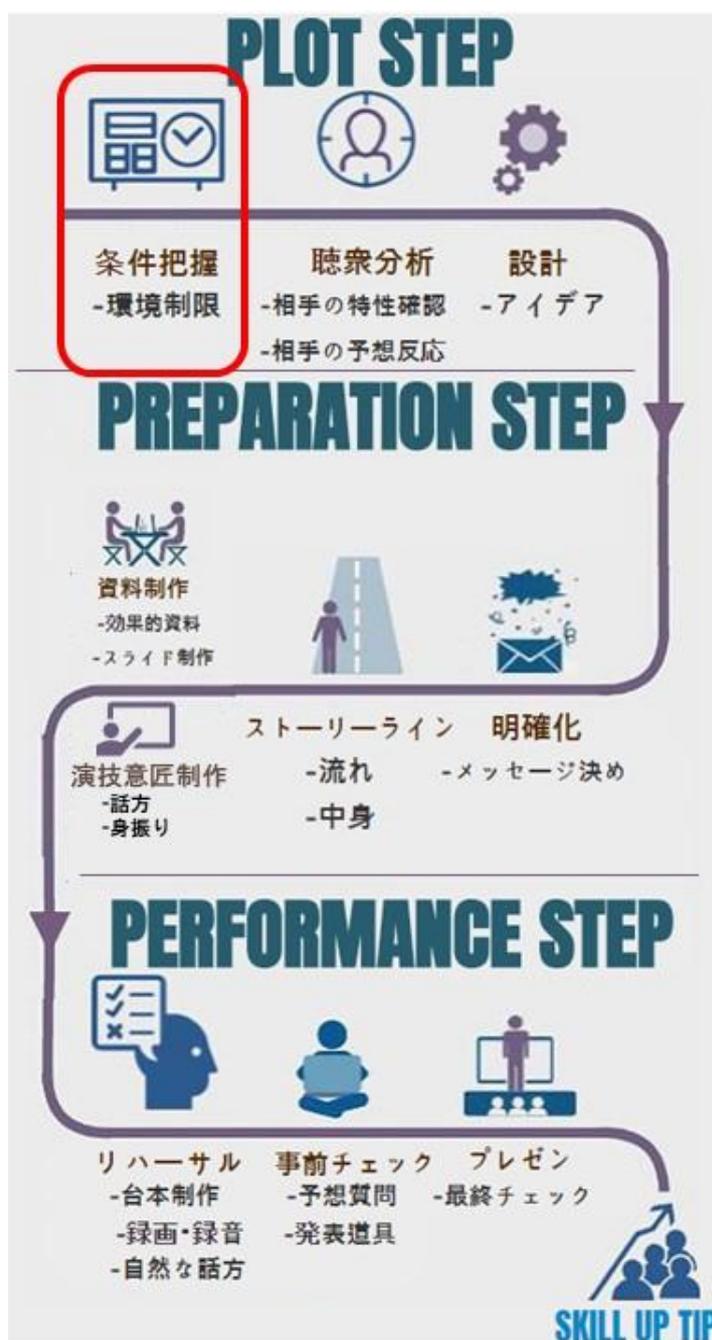


図 姿勢と制作ガイドとの結びつき

[表情]

表情とは説得力を高める技術の要素である。言葉以外の情報でメッセージを強調するための技術であり、伝えたいメッセージがより強烈に聴衆に伝わる効果がある。メッセージの内容や聴衆によって強く左右される項目のためガイド図では聴衆分析、明確化と関連している。



図 表情と制作ガイドとの結びつき

[手振り]

手振りとはこれまでのすべての要素の効果を高める技術の要素である。しかし必要以上に手振りを使用してしまうと、聴衆の視覚に不必要な情報を与えてしまいプレゼンテーションに集中できなくなってしまう。発表環境や聴衆によって手振りを変化させる必要があるためガイド図では条件把握、聴衆分析、資料制作と関連している。



図 手振りと制作ガイドとの結びつき

第 4 章 映像教材を用いた話法改善実験の方法

4.1 実験の方針

本実験では、演劇表現を取り入れた映像教材を用いて、実験前後でのプレゼンテーション話法の変化を記録する。特に本実験では、前述した演劇表現の 8 つの要素について詳しくどのような変化が現れたのか記録する。

4.2 実験に用いるものの概要

4.2.1 チェックリストの概要

本実験のために新規に作成したチェックシートは、下図のように演劇要素の 8 つの要素に分類されており、基本的には一つのチェック項目に関して、対応する教材映像を視聴し学習できるようになっている。



プレゼンテーション話法

チェックリスト

発声について

- 1. しっかりと聴衆が聞こえる声で話している
- 2. マイクにしっかりと声に乗っている
- 3. マイクにノイズが乗っていない
 - a. プレス(息)のノイズが乗っていない
 - b. リップノイズ(唇や舌の音)が乗っていない
- 4. 音の大きさのコントロールができる
- 5. 音の高さのコントロールができる

滑舌について

- 1. しっかりと滑舌良く話すことが出来ている
- 2. 語尾が流れてしまっていない

抑揚について

- 1. 重要なメッセージを強調して話すことが出来ている
- 2. 声の大きさが文章ごとに変化している
- 3. 声の高さが文章ごとに変化している
- 4. 読む速度が文章ごとに変化している
- 5. プレゼンテーション中に話すリズムが一定ではない

図 プレゼンテーション話法チェックシート_1

プレゼンテーション話法 チェックリスト

焦点について

- 1. スライドを見せるときに、自分もスライドの方を見れている
- 2. 自分が重要なメッセージを話すときにスライドに何を表示させるか意識している

間について

- 1. プレゼンテーションが始まると同時に聴衆が聴けるようになっている
- 2. 文章を話している最中にも一瞬の間(ま)が設けられている
- 3. 聴衆に問いかけるプレゼンテーションをしているが間について意識はしている

姿勢について

- 1. 客観的にだらしない姿勢になっていない
- 2. プレゼンテーション中に腕を組んだりしていない
- 3. プレゼンテーション中に足を組んだりしていない
- 4. プレゼンテーション中に癖の動きが出ていない
- 5. プレゼンテーション中に何処を向くべきか意識している

表情について

- 1. プレゼンテーション中に適切な表情になっている
- 2. プレゼンテーション中に PC や原稿ばかりを見ていない
- 3. プレゼンテーション中の目線は意識しており客観的にも問題ない

手振りについて

- 1. スライドを指すときに手振りをしている
- 2. 数字を示すときに手振りをしている
- 3. プレゼンテーション中に癖の動きがでていない

2

図 プレゼンテーション話法チェックシート_2

4.2.2 映像教材集の概要について

映像教材集は全 21 本の映像から成り立っており、チェックシートと対応するように分かれています。また、21 本の振り分けは、演劇表現の 8 つの要素とそれぞれの具体例に合わせて映像が分かれています。それぞれの動画の詳しい内容を述べていく。

1)発声 1

この動画では、発声の初歩である「響かせる」発声のやり方を説明している。また、同時に、マイクをどれくらいの位置で持てばいいのかなども説明している。

2)発声 2

この動画では、マイクを実際に使うときの注意点を説明している。具体的には、ブレスノイズ/リップノイズがどういうものなのか、どのようにノイズがマイクに乗らないようにすればいいのかを説明している。ブレスノイズとは、マイクに発声時に口から出る息がかかりノイズが乗ってしまうことである。リップノイズとは、発声時など唇を動かしたときに、唇の音がマイクに乗ってしまいノイズになってしまうことである。

3)発声 3

この動画では、後述する抑揚の項目で音の変化が必要になるために、高音と低音をどのように出せばいいかを説明している。具体的には、低音は胸に音が響くように、高音は頭頂に響くように発声を行えばよい。また、低音と高音を出すときの注意点も説明している。

4)滑舌 1

この動画では、発声がある程度出来ているという前提で、滑舌をどのように良くすればいいかを説明している。ただし、骨格などの関係で滑舌が悪い人もいるため、最も簡単に滑舌を矯正するために文章を読む「速度」について触れている。

また、「か」を「Ka」に分類し、母音と子音をどちらも意識して発声することで滑舌を良くする方法も紹介している。

同様に意識の問題で、文章の最後を「流してしまう」ことへの注意点も説明している。

5)抑揚 1

この動画では、「私が今回紹介するのはプレゼンテーションの話し方についてです」という例文を用いて、文章の中で最も伝えたい部分を強調させる方法を説明している。特にこの動画では、音の大小の変化を用いて抑揚をつける方法を説明している。

6)抑揚 2

この動画でも、「私が今回紹介するのはプレゼンテーションの話し方についてです」という例文を用いて、文章の中で最も伝えたい部分を強調させる方法を紹介している。特にこの動画では、音の高低の変化を用いて抑揚をつける方法を説明している。

7)抑揚 3

この動画でも、「私が今回紹介するのはプレゼンテーションの話し方についてです」という例文を用いて、文章の中で最も伝えたい部分を強調させる方法を紹介している。特にこの動画では、文章を読む速度の変化を用いて抑揚をつける方法を説明している。

8)抑揚 4

この動画では、文章を読むときのリズムの変化について説明している。具体的には、注意点として「これまでの抑揚の動画を参考にし、出来るだけ変化をつけるようにする」「同じリズム(文節など)で発声を区切らないように気を付ける」などを挙げている。

9)間 1

この動画では、プレゼンテーション開始時の間について説明している。プレゼンテーション開始時の間は聴衆が聴く準備が出来ていない場合に、聴衆に集中してもらうための準備の時間を作るためのものである。

10)間 2

この動画では、プレゼンテーション中に聴衆に「考えてもらう」ための時間を作る間について説明しています。例としては、プレゼンテーション冒頭の背景説明の時に、聴衆に共感を得るために問いかけや投げかけをしたときの間などがあることを説明している。

11)間 3

この動画では、間を用いて文章中の重要な言葉を強調する方法を「私が今回紹介するのはプレゼンテーションの話し方についてです」という例文を用いて説明している。また、間と倒置法を用いて、特に言葉を強調する方法も紹介している。

12)焦点 1

この動画では、スライドなどのプレゼンター以外の場所に聴衆の視線を誘導するために行う「焦点の共有」について説明している。具体的には、プレゼンターが聴衆に注目してほしい箇所を聴衆と同じように視ることで、視線を誘導するという方法である。

また、スライド等に重要な情報を示しているときのプレゼンターの動きの注意点なども説明している。

13)焦点 2

この動画では、プレゼンターの言葉に集中してもらい、言葉に説得力を持たせるための「焦点の占有」について説明している。具体的には、言葉で伝えたい重要なメッセージがあるときのスライド作りの注意点などである。視線が拡散しないように不必要な情報を出来るだけ削ることについて説明している。

14)表情 1

この動画では、プレゼンテーションのストーリーや伝えたいメッセージに合わせて表情を変えることの注意点や意識、練習法を説明している。

15)表情 2

この動画では表情作りの一つである目線について説明している。具体的には、目線と説得力の関係性、聴衆を見て話すことのメリット、焦点の共有について説明している。

16)姿勢 1

この動画では、プレゼンテーション中の姿勢と説得力や集中力との関係、綺麗な姿勢の作り方などを説明している。

17)姿勢 2

この動画では、プレゼンテーション中の足の形についての注意点や基本姿勢を説明している。

18)姿勢 3

この動画では、プレゼンテーション中の腕の位置についての注意点や基本姿勢を説明している。

19)姿勢 4

この動画では、プレゼンテーション中の身体の向きについて基本姿勢や注意点を説明している。

20)手振り 1

この動画では、プレゼンテーション中の手振りのメリット、注意点などを説明している。特に、焦点の共有の時やスライドを指し示すときの手振りについて説明している。

21)手振り 2

この動画では、プレゼンテーション中に重要な数字が出たときなどに強調させるための手振りを説明している。

これらの動画を、チェックシートの苦手な部分と照らし合わせて参照してもらい、話法を学習してもらおう。

4.3 受講者について

本実験では、2019年11月14日に静岡大学にて行われた、第9回静岡大学ビジネスコンテストに出場し、プレゼンテーションを行った、静岡大学情報学部情報社会学科の3年生1名(以下被験者Aとする)と、同じく行動情報学科の3年生1名(以下被験者Bとする)に被験者として実験協力を頂いた。

4.4 実験の方法

本実験は下図のように大きく5つのフェーズに分けられている。

- 1) ビジネスコンテストで発表した内容をもう一度プレゼンテーションしてもらい映像に記録する。
- 2) 記録した映像を自分で観てもらいながらチェックシートで自己評価してもらおう。
- 3) チェックシートで確認した、自分の苦手分野に対応する学習映像を視聴してもらい。改善する方法や注意することを学習してもらおう。
- 4) 学習した内容をプレゼンテーションに反映するために同じプレゼンテーション内容について、練習を行ってもらおう。
- 5) 最終的に発表練習を行って変化したプレゼンテーションを再び発表してもらい、映像に記録する。

すべてのフェーズにおいて、研究担当者が指示を行い、被験者からの質疑に応答するが、具体的なプレゼンテーションなどのアドバイスは行わず。プレゼンテーションはチェックシートと映像教材からのみの影響で変化するように行う。

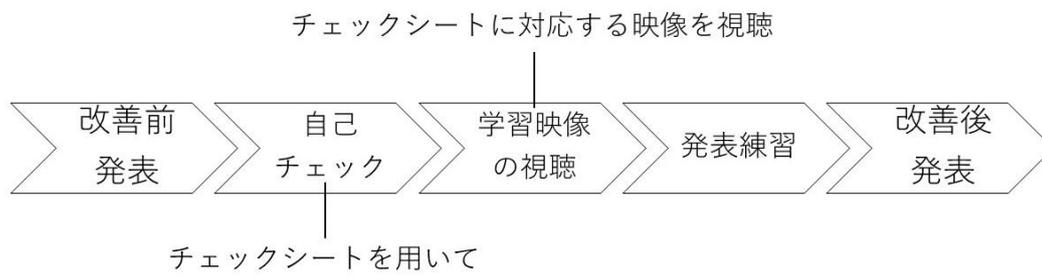


図 実験の流れ

第 5 章 映像教材を用いた話法改善実験の評価

5.1 評価の方針

本実験の評価は、実験前後のプレゼンテーションで演劇表現の8つの要素に関してどのような変化があったのかを評価するものである。

5.2 評価の方法

研究担当者が実験前後のプレゼンテーションの映像記録を確認し、演劇表現の8つの要素に関してどのような変化があったかを記録する。それぞれの要素に関しての評価は下図の本実験のために新規で作成したチェックシート(以下評価チェックリストとする)に従って行う。



The image shows a checklist for evaluating presentation speech. It is titled 'プレゼンテーション話法' (Presentation Speech) and '実験評価チェックリスト' (Experiment Evaluation Checklist). The checklist is divided into three sections: '発声について' (About Pronunciation), '滑舌について' (About Articulation), and '抑揚について' (About Intonation). Each section contains a list of items to be checked, with checkboxes next to them. The items are numbered 1 through 4, with sub-items 'a' and 'b' under item 3.

プレゼンテーション話法
実験評価チェックリスト

発声について

- 1. しっかりと聴衆が聞こえる声で話せていない
- 2. マイクにしっかりと声に乗っていない
- 3. マイクにノイズが乗っている
 - a. プレス(息)のノイズが乗っている(回)
 - b. リップノイズ(唇や舌の音)が乗っている(回)

滑舌について

- 1. しっかりと滑舌良く話すことが出来ていない
- 2. 語尾が流れてしまっている(回)

抑揚について

- 1. 声の大きさによる言葉の強調(回)
- 2. 声の高さによる言葉の強調(回)
- 3. 読む速度による言葉の強調(回)
- 4. プレゼンテーション中に話すリズムについて

1

図 評価チェックリスト_1

プレゼンテーション話法
実験評価チェックリスト

焦点について

- 1. スライドを見ている割合(%)
- 2. 正面を向いている割合(%)
- 3. PC 画面を見ている割合(%)

間について

- 1. プレゼンテーションが始まると同時に聴衆が聴けるようになっていない
- 2. 言葉を強調するための間(回)
- 3. 聴衆に問いかけるプレゼンテーションをしているが間について意識はしていない

姿勢について

- 1. 客観的にだらしのない姿勢になっている
- 2. プレゼンテーション中に腕を組んだりしている
- 3. プレゼンテーション中に足を組んだりしている
- 4. プレゼンテーション中に癖の動きが出ている(回)

表情について

- 1. プレゼンテーション中に適切な表情になっている

手振りについて

- 1. スライドを指すときに手振りをしている
- 2. 数字を示すときに手振りをしている

2

図 評価チェックリスト_2

また、被験者本人にも実験前後のプレゼンテーションの映像記録を見てもらい、どのように変化したと感じたのか、また、実験の感想についてもインタビューを行う。

5.3 評価の結果

5.3.1 被験者 A の実験の結果

被験者 A が自分のプレゼンテーションを見て自己評価を行ったチェックシートが下図である。



プレゼンテーション話法

チェックリスト

発声について

- ✓ 1. しっかりと聴衆が聞こえる声で話している
- ✓ 2. マイクにしっかりと声に乗っている
- ✓ 3. マイクにノイズが乗っていない
 - ✓ a. ブレス(息)のノイズが乗っていない
 - ✓ b. リップノイズ(唇や舌の音)が乗っていない
- 4. 音の大きさのコントロールができる
- 5. 音の高さのコントロールができる

滑舌について

- ✓ 1. しっかりと滑舌良く話すことが出来ている
- ✓ 2. 語尾が流れてしまっていない

抑揚について

- 1. 重要なメッセージを強調して話すことが出来ている
- 2. 声の大きさが文章ごとに変化している
- 3. 声の高さが文章ごとに変化している
- 4. 読む速度が文章ごとに変化している
- 5. プレゼンテーション中に話すリズムが一定ではない

1

図 被験者 A のチェックリスト_1

プレゼンテーション話法
チェックリスト

焦点について

- 1. スライドを見せるときに、自分もスライドの方を見れている
- 2. 自分が重要なメッセージを話すときにスライドに何を表示させるか意識している

間について

- 1. プレゼンテーションが始まると同時に聴衆が聴けるようになっている
- 2. 文章を話している最中にも一瞬の間(ま)が設けられている
- 3. 聴衆に問いかけるプレゼンテーションをしているが間について意識はしている

姿勢について

- 1. 客観的にだらしない姿勢になっていない
- 2. プレゼンテーション中に腕を組んだりしていない
- 3. プレゼンテーション中に足を組んだりしていない
- 4. プレゼンテーション中に癖の動きが出ていない
- 5. プレゼンテーション中に何処を向くべきか意識している

表情について

- 1. プレゼンテーション中に適切な表情になっている
- 2. プレゼンテーション中に PC や原稿ばかりを見ていない
- 3. プレゼンテーション中の目線は意識しており客観的にも問題ない

手振りについて

- 1. スライドを指すときに手振りをしている
- 2. 数字を示すときに手振りをしている
- 3. プレゼンテーション中に癖の動きがでていない

2

図 被験者 A のチェックリスト_2

被験者 A は発声の音のコントロールについて、抑揚の付け方全般について、焦点の共有について、間による抑揚の付け方について、プレゼンテーションの身体の向きについて、プレゼンテーション中の目線について、プレゼンテーション中の手振りについて、出来ていないと自己評価した。

そのため、それぞれについて対応する映像を見てもらい、発表練習後、再度発表してもらった。

被験者 A の練習後の発表の評価についてまとめたものが下図である。また、評価チェックリストには項目が存在するが、下図には存在しない項目がある。これは実験の環境上評価できなかったものなどを省いた結果である。また、極端に変化が見られなかった項目も除いている。

		被験者 1	
		実験前	実験後
発声		○	○
滑舌		○	○
抑揚	大小(回)	3	2
	高低(回)	9	9
	速度(回)	2	3
	リズム	不必要な間	一定のリズムの癖
間	強調(回)	3	10
	問いかけ(回)	-	-
焦点	スライド(割合)	32%	59%
	正面(割合)	7%	11%
	PC(割合)	61%	30%
姿勢	癖(回)	5	0
表情		-	-
手振り	スライド(回)	1	7

図 被験者 A の実験前後の変化

被験者 A は実験前後で発声、滑舌についての大きな変化は見られなかった。

抑揚に関しては、特に文章の読み方のリズムに関して実験前は不自然な間が発表中に存在したが、実験後はその間が無くなり、一定のリズムで話せるようになっていた。

間に関しては、文章中の言葉を強調するための間が 3 回から 10 回に増加した。

焦点に関しては、実験前は 61% の割合で PC 画面を見ていたが、実験後は 30% に減少し、その分、スライドを見ている割合が 32% から 59% に増加した。

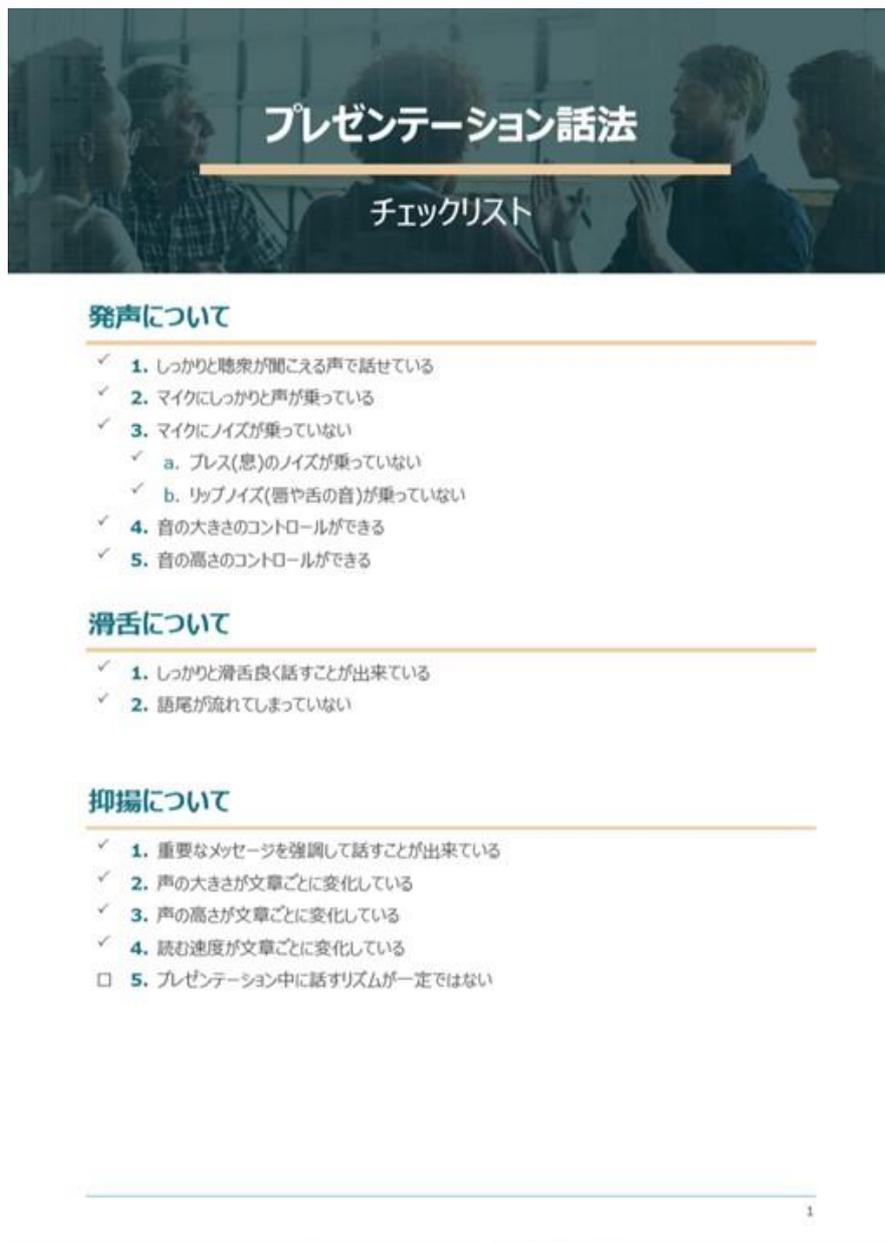
姿勢に関しては、被験者 A には前髪を直す癖があったが、実験後の発表ではその癖はなくなっていた。

表情に関しては、特に大きな変化は見られなかった。

手振りに関しては、スライドの内容を指し示す手振りが 1 回から 7 回に増加していた。

5.3.2 被験者 B の実験の結果

被験者 B が自分のプレゼンテーションを見て自己評価を行ったチェックシートが下図である。



プレゼンテーション話法
チェックリスト

発声について

- ✓ 1. しっかりと聴衆が聞こえる声で話している
- ✓ 2. マイクにしっかりと声に乗っている
- ✓ 3. マイクにノイズが乗っていない
 - ✓ a. プレス(息)のノイズが乗っていない
 - ✓ b. リップノイズ(唇や舌の音)が乗っていない
- ✓ 4. 音の大きさのコントロールができる
- ✓ 5. 音の高さのコントロールができる

滑舌について

- ✓ 1. しっかりと滑舌良く話すことが出来ている
- ✓ 2. 語尾が流れてしまっていない

抑揚について

- ✓ 1. 重要なメッセージを強調して話すことが出来ている
- ✓ 2. 声の大きさが文章ごとに変化している
- ✓ 3. 声の高さが文章ごとに変化している
- ✓ 4. 読む速度が文章ごとに変化している
- 5. プレゼンテーション中に話すリズムが一定ではない

1

図 被験者 B のチェックリスト_1

プレゼンテーション話法 チェックリスト

焦点について

- ✓ 1. スライドを見せるときに、自分もスライドの方を見れている
- ✓ 2. 自分が重要なメッセージを話すときにスライドに何を表示させるか意識している

間について

- ✓ 1. プレゼンテーションが始まると同時に聴衆が聴けるようになっている
- 2. 文章を話している最中にも一瞬の間(ま)が設けられている
- 3. 聴衆に問いかけるプレゼンテーションをしているが間について意識はしている

姿勢について

- ✓ 1. 客観的にだらしない姿勢になっていない
- ✓ 2. プレゼンテーション中に腕を組んだりしていない
- ✓ 3. プレゼンテーション中に足を組んだりしていない
- ✓ 4. プレゼンテーション中に癖の動きが出ていない
- 5. プレゼンテーション中に何処を向くべきか意識している

表情について

- 1. プレゼンテーション中に適切な表情になっている
- ✓ 2. プレゼンテーション中に PC や原稿ばかりを見ていない
- ✓ 3. プレゼンテーション中の目線は意識しており客観的にも問題ない

手振りについて

- ✓ 1. スライドを指すときに手振りをしている
- ✓ 2. 数字を示すときに手振りをしている
- ✓ 3. プレゼンテーション中に癖の動きがでていない

2

図 被験者 B のチェックリスト_2

被験者 B は、間による抑揚の付け方について、聴衆に問いかけを行った時の間について、プレゼンテーション中の身体の向きについて、プレゼンテーション中の表情について、出来ていないと自己評価した。

そのため、それぞれについて対応する映像を見てもらい、発表練習後、再度発表してもらった。

被験者 B の練習後の発表の評価についてまとめたものが下図である。また、評価チェッ

クリストには項目が存在するが、下図には存在しない項目がある。これは実験の環境上評価できなかったものなどを省いた結果である。また、極端に変化が見られなかった項目も除いている。

		被験者 2	
		実験前	実験後
発声		○	○
滑舌		○	○
抑揚	大小(回)	1	2
	高低(回)	2	7
	速度(回)	1	4
	リズム	-	-
間	強調(回)	2	5
	問いかけ(回)	×	1
焦点	スライド(割合)	73%	18%
	正面(割合)	3%	49%
	PC(割合)	24%	33%
姿勢	癖(回)		1
表情		無表情	問いかけの時の柔らかい表情
手振り	スライド(回)	0	0

図 被験者 B の実験前後の変化

被験者 B は実験前後で発声、滑舌についての大きな変化は見られなかった。

抑揚に関しては、音の高低の変化を利用した言葉の強調が 1 回から 7 回に増加していた。また読む速度の変化を利用した言葉の強調も 1 回から 4 回に増加していた。

間に関しては、文章中の言葉を強調するための間が 2 回から 5 回に大きく増えた。また、プレゼンテーション中に聴衆に問いかける部分を新たに設定し、その時にも間を設けていた。

焦点に関しては、実験前は 73%の割合でスライドを見ていたが、実験後は 18%に減少し、

その分、正面を見ている割合が3%から49%に増加した。

姿勢に関しては、被験者 B に実験後の発表で髪を触る動作が新たに現れた。

表情に関しては、実験前は一貫した表情であったのが、実験後は聴衆に問いかける場面で少し柔らかな表情が見えた。

手振りに関しては、変化は見られなかった。

5.4 実験による効果の考察

5.4.1 被験者 A に対する考察

被験者 A に実験後行ったインタビューでは実験の効果に関して以下のような回答が得られた。

- ・声の大きさや話し方は自分の意識よりも変化が現れていなかった
- ・動きに関してははっきりと変化が現れており、その結果、説得力や安心感が生まれたように感じた
- ・動きに変化が現れた理由としては、実験前は何となく行っていた動作を意識することで、実験後は意図を付加することが出来たのでそうなったのではないかと考えられる
- ・言葉の強調を行うための間について大きな変化が見られたのは、単純に間を設けるといふ行為がやりやすかったことが理由として考えられる

被験者 A のインタビューと変化の図からも見て取れるように、やはり声の変化による抑揚付けは間と比べるとかなり難しいことが分かる。これは実験開始から実験終了までの1時間30分程度という時間制限の中でその変化をつけることが難しいことが原因ではないかと考える。

動きに変化が見られたのも、インタビュー結果同様に一つ一つの動作に意図が付与され、それ以外の不必要な情報となる動作を減らしたことにより、客観的に見やすいプレゼンテーションになったのではないかと考えられる。

プレゼンテーションに何処を見ているかという焦点の変化も、上述の動作同様に、今何処を見るべきかという意図が付与されたことが PC 画面を見ている割合に大きく影響を与えたと考えられる。また、被験者 A のプレゼンテーションがスライドの図を用いてビジネスモデルを説明する場面が多かったことから、スライドを見ている割合が大きく増加したことも同様に考えられる。

5.4.2 被験者 B に対する考察

被験者 B に実験後行ったインタビューでは実験の効果に関して以下のような回答が得られた。

- ・スライド中にユーザーの行動のフローを紹介するページがあったが、そのフローに対する聴衆が注目する場所が変化した

- ・この変化は、聴衆を、元々フローの一部分のみに注目させていたのを、フローの全体への注目へと変えるものだった

- ・その結果フローがどのようなものなのか、聴衆がイメージしやすくなったように感じられた

- ・最後にプレゼンテーションのまとめを紹介するページでは、変化前は淡々と読んでいて、あまり印象に残らなかったが、実験後は抑揚をつけることや、目線を正面に切り替えたことによってメッセージ感が強くなったように感じられた。

- ・音の高低による言葉の強調の変化は特に意識していなかった。

被験者 B のプレゼンテーションでは特に、聴衆に対して問いかけをする場面と最後のメッセージの場面で大きな変化が見られたことが分かった。

聴衆に対する問いかけは、ユーザーの行動のフローを紹介するページで行っており、ユーザーと聴衆を同一視するものであったために、新たに行動として追加していたが、その結果意図通りにフローが分かりやすくなったように考えられる。

最後のプレゼンテーションのまとめのページでも、視線と抑揚によって、説得力と聴衆の理解のしやすさがそれぞれ変化し、結果的に印象に残るまとめになったように考えられる。

音の高低による抑揚は、被験者本人は意識していなかったようだが、読む速度を変化させて言葉を強調する際に、同時に付与された抑揚ではないかと考えられる。

焦点の変化は大きくスライドを見ている割合が正面を見ている割合に映ったと考えられる。これは、自らのメッセージを伝えるときに、説得力を増加させるために正面を向くという意図がプレゼンテーション中に新たに付与された結果だと考える。

表情の変化も、問いかけを新たに行ったことにより、ただの説明ではなく共感を得る手段として笑みが新たに意図されたと考えられた。

5.4.3 実験全体の考察

実験後に行った両者のインタビューにより、

第6章 スキットを用いたプロトタイプ発表実験の方法

6.1 実験の方針

6.2 受講者について

6.3 実験の方法

第7章 スキットを用いたプロトタイプ発表実験の評価

7.1 評価の方針

7.2 評価の方法

7.3 評価の結果

7.4 実験による効果の観察

第 8 章 結論

8.1 結論

8.2 今後の課題

参考文献

- [1]厚生労働省(2004年4月7日)「就職に向かって頑張る若年者を支援する“YES-プログラム”を展開若年者就職基礎能力取得の目安」
<<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/04/h0427-2c.html>>2020年1月28日アクセス
- [2] 澤円(2017)「マイクロソフト伝説マネージャーの世界 No.1 プレゼン術」ダイヤモンド社
- [3]ジェリー・ワイズマン(2004)「パワー・プレゼンテーション」ダイヤモンド社
- [4]一般社団法人日本経済団体連合会「2018年度新卒採用に関するアンケート調査」(2018年11月22日)一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ<<https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf>>2020年1月28日アクセス
- [5]ジーン・セラズニー(2004)「マッキンゼー流プレゼンテーションの技術」東洋経済新報社
- [6]情報処理学会第139回CE研究発表会「プレゼンテーション制作法に関する学生向け学習方式」金ヨソ(静岡大学大学院)、湯浦克彦(静岡大学)
- [7] 日本感性工学会論文誌 Vol.15 No.3 pp.363-368(2016)『発話中の「間」がプレゼンテーションに対する聴衆の支持に与える影響』横井聖宏(長崎総合科学大学)、馬場康輔(吉本総合芸能学院 NSC 東京)、須藤秀紹(室蘭工業大学)、山路奈保子(室蘭工業大学)

謝辭

付録